

日本平和教育研究協議会と雑誌『平和教育』（二）
— 誌面構成 —

丸山 剛史，外池 彩萌

宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第73号 別刷

2023年3月

日本平和教育研究協議会と雑誌『平和教育』(二)

― 誌面構成 ―

丸山 剛史⁺・外池 彩萌⁺

三 誌面構成

前報では、日本平和教育協議会の機関誌『平和教育』発刊の経緯について記した¹。本報では同誌の目次を手がかりにして、同誌の誌面構成、すなわち記事の種類について若干の特徴を指摘したい。本来ならば記事の内容に言及し、立ち入った検討を行う必要があるが、創刊号から最終号までまとめて所蔵している機関は少なく²、新型コロナウイルス感染問題が収束しない現在において雑誌記事の閲読及び通読は容易ではないため、すでに収集した目次から確認できることを指摘するに止める。本稿では記事の種類に関して述べることにする。

雑誌記事は、「主張」(第三八号より「提言」、論文(第九号より「論文」と明記される)、「実践記録」、「インタビュー」、連載「作家と作品」、連載「軍隊教育の研究」、連載「自然科学における課題と展望」、「資料室」、「マスコミの動向」、「児童文化」)で始まる。

その後、記事の種類は増えていく。表(後掲)を参照されたい。具体には次のとおりである。「実践」(第二号より)、「私の戦争体験」(同)、「レポート」(第五号より)、「戦争児童文学の紹介とその実践」(同)、「日平研図書室」(同)、「日平研の窓」(第九号より)、「図書紹介」(第一四号より)、「連載 戦時下教育の研究のために」(第一六号より)、「私の平和教育」(第一九号より)、「調査」(第二二号より)、「こだま 読者の

ひろば」(第二四号より)、「わたしの授業」(第二五号より)、「読切・連載」(同)、「連載・私の本棚」(第二八号より)、「時代を見る眼」(第三〇号より)、「世界の平和教育・運動の動向」(第三三号より)、「戦争資料館を訪ねて」(第三五号より)、「わたしが平和(教育)の大切さにめざめたとき」(第三八号)、「連載 平和教育入門講座」(同)、「教室の窓から」(第四四号より)、「連載 戦後日本の平和教育の歴史(試論)」(第七一号)、このほか「子どもの詩」(第六一号より)。

(一) 「主張」及び「提言」

「主張」及び「提言」で特集のテーマに関して述べられている。特集の意図を確認しようとする「主張」及び「提言」を集めて検討する必要がある。

(二) 論文と教育実践報告

特集に関する「論文」と、「実践記録」ないしは「実践」が必ず掲載されている。掲載数は「論文」が二本前後であり、「実践記録」・「実践」

⁺ 宇都宮大学 共同教育学部 (連絡先: marusan@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

⁺ 筑波大学大学院・学生

は少ない時でも二本、多い時は「実践記録」・「実践」合わせて七本掲載された。この二種類の記事は創刊号から最終号まで毎号のように掲載されており、本誌の重要な特徴を成している。すなわち、本誌は論文と教育実践報告を重視した雑誌であったと考えられる。

(三) 各地の様子や子どもたちの様子を伝えるレポート

このほか、「レポート」、「各地からの報告(レポート)」、「教室の窓から 子どもたちは今…」といった各地の様子や子どもたちの様子を伝えるレポートも断続的ではあるが長期間掲載されている。これらのレポートは各地の様子や子どもたちの様子を窺い知ることができる貴重な記録であると考えられる。

(四) 戦争児童文学作品と作品を教材とした教育実践報告

連載「作家と作品」は、「戦争児童文学」に関する作家と作品に関する記事が掲載された。取り上げられた作家は、峠三吉、大田洋子、大岡昇平、長崎源之助、井伏鱒二、松谷みよ子、郷静子、原民喜、山本薩夫、来栖良夫、山口勇子らである。取り上げられた作品は次のとおりである。山口勇子「おこりじぞう」、来栖良夫「村いちばんのさくらの木」、もう半分の顔」、大川悦生「おかあさんの木」、「火のなかの声」、大野允子「夜のくすのき」「つるのとぶ日」、こいでたかし「ぞうれつしやがやつてきた」、いぬいとみこ「トビウオのぼうやはびょうきです」、峠三吉「原爆詩集」、いぬいとみこ「川とノリオ」、今西祐行「二つの花」「ヒロシマの歌」、高橋宏幸「チロップのきつね」、土家由岐雄「かわいそうなぞう」、あまんきみこ「ちいちゃんのかげおくり」、長崎源之助「おかあさんの紙びな」。

同連載の途中から「戦争児童文学の紹介とその実践」のコーナーが設けられ、「戦争児童文学」作品とそれに関する教育実践報告が掲載された。「戦争児童文学の紹介とその実践」は、第五号(一九七七年)から第二二号(一九八五年)まで十年近く続いた。その後、児童文学作品に関しては「教材研究」欄で取り上げられていた。

児童文学、特に「戦争児童文学」作品は平和教育において重要な教材の一つであると考えられる。「戦争児童文学」作品の近年の動向を把握する必要がある^四。

(五) 軍隊教育研究

連載「軍隊教育の研究」も本誌の重要な特徴を成すものとして看過できなれと思われる。本誌創刊に重要な役割を果たした城丸章夫は、軍隊教育研究の開拓者として知られている^三。連載「軍隊教育の研究」のテーマは次のとおりである。

- ① 「軍は在郷軍人会をどうして国民をどう教育しようとしたか」(遠藤芳信)
 - ② 「軍は兵士に戦争をどう教えたか」(城丸章夫)
 - ③ 「軍隊教育と国民教育のかかわり」(木下秀明)
 - ④ 「軍は軍隊生活をとおして軍人精神をいかにたたきこんだか」(太田卓)
 - ⑤ 「軍隊教育はいかなる教育方法によってなされたか」(遠藤芳信)
 - ⑥ 「軍隊と学校の教育方法はどうかかわっているか」(遠藤芳信)
 - ⑦ 「戦争・軍隊の研究と平和教育」(城丸章夫)
 - ⑧ 「忠節について―軍人勅諭と教育勅語の研究―」(城丸章夫)
- 連載は八回で終了している。同連載終了後、新たな連載「戦時下教育

の研究のために」が始まった。「軍隊教育の研究」が「戦時下教育の研究」をのみだしたように見受けられる。「戦時下教育の研究のために」は次のとおりである。

① 「勤勞奉仕・勤勞動員（一）」（城丸章夫）

② 「勤勞奉仕・勤勞動員（二）」（城丸章夫）

③ 「学校防空関係資料」（城丸章夫）

同連載は三回で終了したが、城丸、遠藤らはその後も継続的に軍隊教育研究、戦時下教育研究に取り組んだことは記しておきたい^五。

（六）自然科学と戦争・平和教育の関係を問う

連載「自然科学における課題と展望」では、自然科学との関係が問われていた。連載の論題及び論者は次のとおり。

「自然科学者から見た核兵器体系の問題」（山田英二）

「自然科学の発達と人間性」（大谷省三）

「核開発をめぐる諸問題と科学者」（永井秀明）

「現代科学における技術と平和の問題」（横道英雄）

「自然環境を守る闘いと平和研究」（神山恵三）

「雷研究と避雷」（北川信一郎）

「生命と生活を守る闘いと平和教育」（久保全雄）

「分子生物学の発展と今日の危機的状况」（道家達将）

連載は八回で終わったが、戦争・平和と自然科学との関係に留意する必要があることを示唆していると思われる。

（七）戦争資料館への着目

連載「戦争資料館を訪ねて」が掲載されたのは第三六号から第四六号

までであり長くはないが、他誌ではあまり扱われない記事として注目しておきたい。取り上げられた「戦争資料館」は次のとおりである。

大阪府平和祈念戦争資料室

広島平和記念資料館

ひめゆり平和祈念資料館の開館に寄せて

長崎国際文化会館

第五福竜丸展示館

南風原文化センター

大久野島・毒ガス資料館

平和資料館“草の家”——高知

戦災復興記念館——宮城

戦災復興記念館——神奈川

立命館大学国際平和ミュージアム——京都——

ピースおおさか・大阪国際平和センター

埼玉平和資料館

同連載の後、ピーター・ヴァン・デン・ダンガン「平和博物館と平和教育 上・下」、安齋育郎「平和博物館運動の現状と課題」、山根和代「世界と日本の平和博物館」といった論考・解説も掲載された。本誌はこうした国際的な平和博物館運動に与するものであったと考えられる。近年、戦争資料館を主題にした単行本も現れるようになっており^六、戦争資料館の現状を確認する必要がある^七。

（八）戦争・平和・平和教育体験記

「私の戦争体験」も長期間続いた記事である。

「私の平和教育」が一定期間続いたが、この間に「わたしの授業」、「私

が平和教育をはじめたころ、「わたしが平和（平和教育）の大切さにめざめたとき」の記事が創り出され、断続的に長期間続いた。経験談を掲載することにより、平和教育に対する距離感を縮め、平和教育の研究と教育実践へ誘うという意味があったのであろうか。

（九）そのほか

廃刊近くに連載された「戦後日本の平和教育の歴史（試論）」（佐貫浩執筆）は、時期区分論を展開しており、戦後日本平和教育史だけでなく、戦後日本教育史を考える上でも必読の論考である。

このほかにもいくつかのコーナーはあるが、単発的、あるいは短期間で掲載が終了していた。

まとめにかえて

このように、『平和教育』誌は論文と教育実践報告を主体としていた。記事は断続的ではあるが長期に及ぶもの、名称を変えながら長期間掲載されたもの、短期間で終了したものなどに分けることができる。記事の種類は固定されておらず、生成と発展的解消が図られたとみられ、状況に応じて試行と工夫が積み重ねられたと考えられる。こうした記事の種類の変遷は平和教育運動推進の試行錯誤の過程であり、各種の記事は平和教育推進のための視野や対象の範囲を確認していたものと思われる。いずれにしても機会を改め、それぞれの記事の内容を検討し、『平和教育』誌の記事のもつ意味を明らかにしたい。

—雑誌創刊の経緯— 『宇都宮大学共同教育学部研究紀要 第一部』第七二号、二〇二二年、五一—五三六ページ。

二 確認した限りでは次の四館に限定されると思われる。大阪教育大学附属図書館、文教大学越谷図書館、北海道教育大学附属図書館、和光大学附属梅根記念図書・情報館。

三 遠藤芳信「天皇制分析と軍隊教育研究の意義 —第10巻解説—」『城丸章夫著作集 第一〇巻 軍隊教育と国民教育』青木書店、一九九二年、二九七—三二二ページ。

四 関連する先行研究として幸田国広「国語教科書における戦争平和教材の位相」『国語教育史研究』第一七号、二〇一七年、八九—九九ページ）がある。

五 城丸に関しては著作集刊行後、『戦争・安保・道徳 —平和教育研究ノート—』（あゆみ出版、一九九三年）が著された。遠藤に関しては『近代日本の戦争計画の成立 —近代日本陸軍動員計画策定史研究—』（桜井書店、二〇一五年）が著された。

六 例えば、志賀賢治『広島平和記念資料館は問いかける』岩波新書、二〇二〇年。

七 「平和祈念展示資料館（総務省委託）」のウェブページの「リンク集」に各地の関連施設が掲げられており、ここには連載「戦争資料館」で紹介されていない施設もある (<https://www.heiwakinen.go.jp/link-index/> 二〇二二年一〇月三日最終閲覧)。

令和四年十月三日受理

表.『平和教育』誌の記事

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31					
主張																																				
提言																																				
論文																																				
実践記録																																				
実践																																				
実践と理論（理論と実践）																																				
資料室																																				
資料																																				
実践・資料室																																				
実践・報告（実践レポート）																																				
各地からの報告（レポート）																																				
調査																																				
各地の動き																																				
教室の窓から 子どもたちは、今…																																				
戦争児童文学の紹介とその実践																																				
レポート																																				
私の戦争体験																																				
私の平和教育																																				
わたしの授業																																				
連載 私が平和教育をはじめたころ																																				
わたしが平和（平和教育）の大切さにめざめたとき																																				
連載 平和教育入門講座																																				
教材研究 この教材で子どもに何を教えるか																																				
子どもの詩																																				
教師と子どもとの出会い																																				
インタビュー																																				
連載 作家と作品																																				
連載 軍隊教育の研究																																				
連載 自然科学における課題と展望																																				
連載 戦時下教育の研究のために																																				
連載 私の本棚																																				
連載 戦争資料館を訪ねて																																				
連載 戦後日本の平和教育の歴史（試論）																																				
マスコミの動向																																				
児童文化																																				
日平研図書室																																				
図書紹介																																				
書評																																				
映画紹介																																				
評論																																				
日平研の窓																																				
こだま 読者のひろば																																				
時代を見る眼																																				
世界の平和教育・運動の方向																																				
インフォメーション																																				

注.着色部は記事が掲載されたことを示している。

資料 雑誌『平和教育』目次(二)

第二三号 一九八六年七月 (季刊)

特集 生きるめあてを育てる平和教育

主張 教育の国際化というが

論文

生きるめあてを育てる平和教育

人間の尊厳に科学的な社会認識の裏づけを

実践記録 生きるめあてをどう育てるか

戦後史を学ぶ中で平和を問い続ける

人権と平和を中核にすえて

平和と民主主義の灯をともし文化祭

「生きる力」を育てよう地域の異年齢集団づくり

日平研図書室 写真集 女たちの昭和史／大月書店刊

山田洋次さん・猿橋勝子さんの「子どもたちへの呼びかけ」に込める

わたしたちも考え行動をはじめよう

わたしたちの未来はわたしたちで責任をもつ

おやじと創る「中学生ゼミナール」の中で

わたしたちも平和を守るにない手に

各地からのレポート——九州・大牟田

市民の心を動かした地域平和教育

連載 私が平和教育をはじめたころ

教材研究 わたしの平和教育 子ども感性とひびきあうよい教材を

高橋信雄 (六二)

米沢純夫 (九〇)

こだま 読者のひろば

娘から三宅島の母へ 野崎忍／三宅島の母より娘へ

日平研の窓

実践・資料室 変わってきた自衛隊のPR作戦

川合章 (五)

城丸章夫 (八)

本多公栄 (二六)

谷田川和夫 (二四)

滝安資治 (三二)

磯山和子 (四〇)

開木美那子 (四八)

編集部 (六六)

今井健夫 (七〇)

北村次郎 (七六)

本間美智子 (八四)

下川真剛 (五八)

高橋信雄 (六二)

米沢純夫 (九〇)

釜地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

第二四号 一九八六年一〇月 (季刊)

特集 いじめ・暴力にたちむかうちから

主張 「いじめ」問題と平和をめざす教育

論文

平和に生きる権利とはなにか

いじめ・暴力にたちむかう子どものちから

実践記録 いじめ・暴力にたちむかうちからをどう育てるか

「暴力、言葉の暴力をなくす全校集会」に取り組んで

実態をみつめ、とことん話し合うなかで

「暴力・いじめのない明るい学校」をめざして

日平研図書室 手塚治虫作 アドルフに告ぐ／文藝春秋刊

座談会 いじめ・暴力にたちむかうちから

子どもたちへの呼びかけ」に込める

日本人がしてきたことを正しくとらえこれからの生き方に生かす

「呼びかけ」にこたえられる人間になる

教材研究 わたしの平和教育

今西祐行・作「あるハンノキの話」

各地からのレポート 教え子を再び戦場に送らないために

わたしの平和教育——長崎の地で

修学旅行生に語りつづけて

こだま 読者のひろば 大詔奉戴日のこと

実践・資料室 旧制中学校の学校行事

竹内常一 (八)

服部潔 (二六)

市川広義 (二四)

大和繁 (三二)

能重真作 (四〇)

角岡正郷 (六七)

根岸泉 (七一)

小松崎進 (七六)

関口勲 (八六)

今田斐男 (九〇)

足立郁男 (九九)

盆地はま (八四)

深山正光 (五)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

盆地はま (九八)

第二五号 一九八七年一月 (季刊)

特集 ここからはじめる平和教育

主張 平和の問題を考える力を育てよう
論文 ここからはじめる平和教育
実践記録 ここからはじめる平和教育

いのちの大切さを教えることから
子どもたちとともに“平和のメッセージ”をつくりあげて

「人間の尊厳」を大切にする教師・学校
“平和”をテーマにしたスピーチ指導
平和を守るためにいま高校生は何を
実践記録を読んで

日平研図書室 早乙女勝元編 ターニヤの詩／草の根出版会刊 (五二)
わたしの授業 こんなところから——国語・社会

文学の感動をとおして「人間らしい心」を
録音と復刻史料にもとづく戦争体験学習
各地からのレポート——大阪

地域に根ざす平和教育
読切・連載 私が平和教育をはじめたところ
レポート

空襲時刻表を作って
自主教材「わたしたちと朝鮮」を作って——駒崎亮太先生に聞く

連載 教材研究 群読「人間をかえせ」にとりくんで
こだま 読者のひろば
「生き方を見つめる」子どもたちの目
日本語を話す韓国人
実践・資料室 名古屋大学平和憲章（全文）

大槻和夫（五）
田川時彦（七）

寺内和子（二六）

鍵山和美（二二）

小宮山陽子（二八）
市古博一（三四）

長井正和（四二）
横川嘉範（四八）

河島孝子（五四）
梶野茂男（六二）

寺田英夫（七一）
土田光孝（七五）

関口精一（七九）

（八四）

田宮輝夫（八六）

馬淵由紀（九七）
羽田正国

（六八）

第二六号 一九八七年四月（季刊）

特集 戦争体験学習を問い直す

主張 戦争体験学習を問い直すことの意味
論文

戦争体験学習を問い直す
「語りつぐ戦争体験」から「問いかける戦争学習」へ

実践記録 戦争体験学習をどうすすめてきたか
聞くことをとおして事実を知る

地域から中国侵略の実像をみる
「原爆犯罪」を問いつづけて

わたしの授業 こんなところから
人間を愛し、命や人権をだいにする心を
身近な地域に戦争があった

日平研図書室 英伸三・桑原史成・中村梧郎著 写真で何ができるか
（四八）

各地からのレポート——神奈川
平和に生きる道すじを求めて

読切・連載 私が平和教育をはじめたところ
レポート シンガポールの教科書と日本の戦争責任

子どもとともに 自分や社会を見つめられる子どもたちに
馬淵由紀（七五）

連載 教材研究 「真実と愛」をもとにした人間的文化的英語授業をめざして
阿原成光（八一）

エッセイ 平和教育に思う
こだま 読者のひろば 教育の論理をもっと大切に
連載・私の本棚

日平研の窓
大田堯（八九）
山本敏郎（九八）
大槻和夫（九六）
（九九）

第二七号 一九八七年七月（季刊）

特集 十五年戦争をどう教えるか

根岸泉（五）

佐貫浩（八）

安達喜彦（二六）

中野照雄（二四）
富樫康雄（三二）

椎名麻紗枝（四一）

松田哲（五〇）
吉松正秀（五六）

小田康雄（六二）
岩井幹明（六六）
高嶋伸欣（七〇）

主張 十五年戦争の教材化をめくつて
論文 十五年戦争をどう教えるか —ある戦術的なシナリオ—

城丸章夫 (五)

実践記録

加害と生命と人間性を考えて

中学校の十五年戦争学習 —その視点とプラン

私と十五年戦争

十五年戦争体験の伝承

“女の戦争責任”をめくつて

戦争犯罪と戦犯への道

反戦兵士として生きて

座談会 戦争学習の基本的視点 —人間の生き方と重ねて戦争を問い直す

— 読切・連載 私が平和教育をはじめたころ

私の授業 こんなところから

どの子にもスポーツの感動を

書による平和の詩句制作

実践 二十万人の顔写真を集める

各地からのレポート 平和教育の学習課題を求めて

レポート 国家秘密法案が告げる“新たな戦前”

論文 大学における平和教育 —調査報告と課題

こだま 読者のひろば

いまこそ平和教育を

子どもの日と世界の平和

日平研図書室

私の本棚

黒羽清隆 (八)

勝俣寿夫 (二八)

鮎川伸夫 (二六)

久田栄正

米田佐代子

富永正三

河田毅

阿部哲夫 (六四)

森下弘 (七〇)

横山泰昇 (七七)

安達喜彦 (八〇)

梅田正己 (八四)

藤田秀雄 (八八)

大槻和夫 (九六)

(五八)

(九八)

主張 文学教育と状況の認識
論文 文学・文学者と平和教育

平和のイメージ —『川とノリオ』をどう教えるか—

実践記録 文学作品で戦争をどう教えたか

戦争児童文学をとおして“生命”と“愛”を

文学の語る「とりまく社会状況と人間」をどう読ませるか

人権の海に泳ぐ授業

青年期における読書指導をどうすすめるか

社会と人生に向かう主体的な人間作りを

わたしの選んだ三冊の本

録 鈴木昭一・知念正直・野口健・吉原公二郎・天野卓郎 (五六)

日平研図書室 岩波写真文庫 50 戦争と日本人 —あるカメラマンの記

録 わたしの授業 こんなところから —小学校・音楽

すぐれた教材の発見と授業の創造

読切・連載 私が平和教育をはじめたころ

各地からのレポート 長野

平和が好きです夢があるから

沖縄からの報告 沖縄における平和教育の実践

エッセイ 平和教育 —今問われているもの

時代を見る眼 いまだに謎の被爆の実相

こだま 読者のひろば

平和について考えること

わが妻、四十二歳

資料室 子どもの人権宣言 '87

連載・私の本棚

田川時彦 (五)

山住正己 (八)

浜本純逸 (二六)

松本幸久 (二三)

高杉百合子 (三一)

菅野博行 (三九)

山本明弘 (四七)

江種祐司 (六一)

鈴木幸太郎 (六七)

堀内瑛 (七一)

大城将保 (七五)

吉村徳蔵 (八四)

安斎育郎 (九四)

(九九)

野々山国広

吉本邦人

(八二)

大槻和夫 (九六)

(二八)

(九八)

(五八)

(九六)

(五八)

(九六)

(五八)

(九六)

第二八号 一九八七年一〇月 (季刊)
特集 文学作品で戦争をどう教えるか

第二九号 一九八八年二月 (季刊)

特集 子どもの文化状況にきりこむ平和教育

主張 暴力・低俗文化追放は平和教育の重要課題

論文

藤田秀雄 (五)

平和教育の視点から映像文化の検討を

石子順 (八)

学校は文化のとりでとなりうるか

横川嘉範 (二六)

実践記録

真正面から性といのちの教育を

大和久勝 (二二)

人間らしさよこんにちは 無感覚・無関心・無感動よさらば

四方繁利 (三〇)

高校生の性と学習権

吉田和子 (三九)

いま、子ども文化は

金田茂郎・広瀬恒子・金子さとみ・近藤郁夫・家本芳郎 (四七)

日平研図書室 山田梅雄写真集 みつめる瞳 地域・平和・連帯 (五六)

わたしの授業 こんなところから 中学校・家庭科

平和への思いをモチーフづくりにかめて 藤本寿美子 (五八)

読切・連載 私が平和教育をはじめたころ 本間繁輝 (六五)

各地からのレポート 子どもの心をとらえる平和教育 大谷美子 (六九)

日平研第15回全国平和教育シンポジウム・レポートから

“つり石”が語る戦争の歴史 前田一彦 (七三)

わたしの平和教育 生活させて、表現へ、そして話し合いを

時代を見る眼 ビキニ事件と核の冬 江口季好 (八一)

こだま 読者のひろば 再び三宅島から 安斎育郎 (九四)

資料室 パンプ・生きているうちに核兵器廃絶と援護法を 釜地はま・野崎忍 (九八)

連載・私の本棚 大槻和夫 (九六)

特集 加害をどう教えるか

主張 被害と加害を教えて子どもに何を育てるのか

論文

横川嘉範 (五)

日本の侵略戦争と教育

藤原彰 (九)

加害を教えることの意味

藤井敏彦 (二七)

実践記録 加害をどう教えるか

「加害」を意識しながら歴史授業の中で

忍岡妙子 (二五)

南京事件を教えて

今井省三 (三三)

十五年戦争における日本のアジア侵略を学ぶ

木村宏一郎 (四一)

教科書裁判での証言を終えて

渡辺賢二 (五〇)

教科書検討で学んだこと

和田哲子 (五四)

教科書裁判沖繩法廷の意味

城丸章夫 (五八)

日平研図書室 西島有厚著 切手で読む第二次世界大戦

木崎克昭 (六二)

わたしの授業 こんなところから 小学校・特別活動

世界の子どもから学ぶ生き方

読切 連載

私が平和教育をはじめたころ

山崎貫一 (六九)

首都東京の二つの資料館をめぐる

根岸泉 (七三)

わたしの戦争体験 集団疎開

酒井貞夫 (七七)

レポート フランスより 平和思想の継承 ミホ・シボリ新聞

(八〇)

わたしの平和教育 平和への思いを子どもに心にとどける

山岡和範 (八六)

時代を見る眼 「平和技術」と「軍事技術」の間

安斎育郎 (九四)

こだま 読者のひろば

(九八)

いま始まった私の沖繩

内藤賢司

生命の賛歌としての平和教育を

小沢均 (九三)

日平研の窓

連載 私の本棚

大槻和夫 (九六)

第三〇号 一九八八年四月 (季刊)

第号三二号 一九八八年七月 (季刊)

特集 ヒロシマ・ナガサキ修学旅行

主張 ヒロシマ・ナガサキに立つことの意味
論文

ヒロシマ・ナガサキをたずねることの意義
広島・長崎で何を学ぶか

実践記録 ヒロシマ・ナガサキ修学旅行

子どもたちに生き方を問うナガサキ修学旅行
ヒロシマで「生きる力」を学んだ高校生

ヒロシマへ——教師集団のとりくみ
シロシマ・ナガサキで学ぶ

「ヒロシマ」で学ぶ
「ナガサキ」で学ぶ

現地の声

ヒロシマの現地から
ナガサキの現地から

修学旅行のてびき

「碑めぐり」をするとき
「語り部の話」を聞くと

原爆病院・養護施設をたずねる
「修学旅行を手伝う云」をつくって

原爆体験と「加害者・被害者」問題
広島・長崎への旅と証言活動

資料

広島・長崎／「遺跡」・「碑めぐり」地図
統計資料から見た原爆学習の実態

修学旅行事前学習のために
レポート ニュージールランドの平和教育

わたしの平和教育 間接体験にも心を動かす子に

城丸章夫 (五)

森田俊男 (八)

田川時彦 (二四)

前川新三郎 (二二)

菊池英行 (三〇)

安島文男 (三八)

米田進 (四六)

広瀬方人 (五〇)

山本雅人 (五四)

末長浩 (五八)

池田正彦 (六二)

今田斐男 (六四)

植野浩 (六六)

江口保 (七六)

伊東壮 (八一)

鎌田定夫 (八六)

(六八)

(七二)

(七四)

(八七)

古藤洋太郎 (九二)

時代を見る眼 非核多数派の形成

第号三二号 一九八八年一〇月 (季刊)

特集 オカルト・夢・理想

主張 オカルト・占いブームと科学的精神の形成
論文

現代のオカルトブームと教育

「生きる」意味・原風景・民話的想像力
実践記録 オカルト・夢・理想

愛が涵める分だけ商品文化がはいるこむ
中学生の占いブームをみる

子どもの現実認識と未来をつかむ指導
青年期における科学的思考の形成

私の子ども像

小森香子・坂本光男・小木美代子・渋谷清視・中野光 (四九)

日平研図書室

脚本・監督・高畑勲 アニメーション
宗教者の平和運動

仏教徒と平和運動
キリスト教徒と平和運動

わたしの授業 こんなところから 中学校・美術科
美術科をとおしての平和教育

レポート SSD IIIに参加して
人間は核兵器と共存できない

資料 報告・原爆被害者の訴え
わたしの平和教育 大学における平和教育と一般教育

時代を見る眼 SSD IIIと核抑止論
こだま 読者のひろば 戦争・金魚・文鳥

連載 私の本棚

田沼肇 (九八)

佐貫浩 (五)

城丸章夫 (九)

古田足日 (二七)

吉野啓一 (二三)

家本芳郎 (一九)

小出湧三 (三六)

安斎育郎 (四二)

火垂るの墓 (五八)

近江幸正 (六〇)

平山照次 (六四)

西村元子 (六八)

横川嘉範 (七四)

(八〇)

山田浩 (八七)

田沼肇 (九六)

早川寛司 (九五)

石上正夫 (九八)

第三号 一九八九年二月 (季刊)

特集 子どもの平和宣言と自治

主張 平和宣言―子どもの意見表明と社会参加の権利

論文 学校平和宣言と生徒の自治

実践記録

子どもたちとつくる「平和宣言」

「生徒会人権宣言」を創り出す力

平和の尊さを学ぶ「非核平和宣言」

全校で取り組む「生徒会・学級平和宣言」

家族をはぐくみ鍛える「反核家族宣言」

私が選んだ道・私の発言 若者の見た平和

高校生は今

クラブ活動の中で生き方を見い出す高校生 大亀信行 (六一)

日平研図書室

ベトナム戦争の記録編集委員会編 ベトナム戦争の記録

わたしの授業 こんなところから

文学で学ぶ戦争と人間 西村睦美 (六六)

わたしの戦争体験

「ごめんね、カエル君」――山の手大空襲の記録

わたしの平和教育 わたしは平和教育二年生

世界の平和教育・運動の動向

平和的文化創造のために

時代を見る眼 「事実」の使い分け

こだま 読者のひろば 被爆者から学んだこと

連載 私の本棚

季刊・平和教育 既刊主要目次

森田俊男 (五)
佐貫浩 (八)

阿藤波利文 (二六)

玉城昌賢 (二四)

萱原威 (三三)

佐世保工業高 (四二)

本間美智子 (五一)

石田昌隆 (六〇)

第四号 一九八九年四月 (季刊)

特集 沖縄で何を教えるか

主張 わたしの中の沖縄・日本・そして世界

論文

沖縄が問いかけるもの

日本における核廃絶の結節点

実践記録

現状を意識させ、正しく見る目を育てる

砲弾には当たらなかつたけれど

「バナナ」から「沖縄戦」へ

沖縄で生き方をみつめる修学旅行

沖縄を考える

「集団自決」とは何か

「ひめゆり」の過去と現在

日平研図書室 石川光陽著 痛恨の昭和

沖縄を訪ねる

沖縄で何を見るか

歩く・見る・考える

沖縄からのレポート ビキニで被爆した沖縄の漁船

文献紹介 沖縄を考えるための本

わたしの授業 こんなところから

教科を結ぶ平和学習の試み

世界の平和教育・運動の動向

平和教育に関するカナダ教員連盟の声明

わたしの戦争体験 八月六日・私の慚愧

こだま 読者のひろば 戦争はまだ続いている

横川嘉範 (五)

城丸章夫 (八)

田港朝昭 (二六)

金城恵美子 (二三)

里井洋一 (二九)

我那覇生吉 (三八)

山本至宏 (四四)

安仁屋政昭 (五四)

仲地哲夫 (六〇)

(五二)

村上有慶 (六五)

宇根悦子 (七四)

大城保英 (七八)

山川宗秀 (八二)

茂木一夫 (八六)

(九二)

真実井房子 (九五)

高島喜代恵 (九九)

第三五号 一九八九年七月 (季刊)

特集 子ども・青年の生と死

- 主張 奥行のあるしつとりとした生活を
論文 子ども・青年の生と死 川合章 (五)
- 実践記録 生と死をどう教えるか 金田茂郎 (八)
- 自然と生命の対話をとおして生きる力を
“心を動かす”生徒たち 坂本玄子 (二七)
- 生きたいと願いつつ亡くなった友へ 根岸泉 (二六)
- わたしの授業 こんなところから 佐伯洋 (三四)
- 廣島・広島・ヒロシマにこだわりながら 松井久治 (四三)
- 日平研図書室
- 吉田ルイ子 写真・文 南ア・アパルトヘイト共和国 (四八)
- 天皇問題を考える
天皇制について 城丸章夫 (五〇)
- 天皇と原爆と子ども・青年の死 田川時彦 (五六)
- 自らの論理や生活実感を通して考える 石井建夫 (六二)
- “神”となった天皇 渡辺賢二 (六九)
- わたしの平和教育
全校とりくみのなかで国語科教師として 原田真市 (七五)
- わたしの戦争体験 ヒロヒト・ハイウェイの空の下で 山崎元 (八三)
- 資料紹介 聞き書き中心の戦争話——日露戦争 (八七)
- 連載 戦争資料館を訪ねて1 大阪府平和記念戦争資料室 (九二)
- レポート 三宅島と非核平和宣言 亀井淳 (九四)
- こだま 読者のひろば 「きつつ」の中に平和 及川診 (九八)
- 日平研の窓 (九九)
- 第三六号 一九八九年一〇月 (季刊)**
- 特集 平和教育、いま何が問われているか 深山正光 (五)
- 主張 新学習指導要領と平和をめざす教育 藤井敏彦 (八)
- 論文 平和教育の到達点と当面する課題
実践記録

- 地域に根ざす一五年戦争の学習
平和教育を柱とした道徳教育 川本治雄 (二六)
- 昭和天皇の死をどう生徒は受けとめたか 西村信友 (二五)
- 新学習指導要領を読んで 若菜俊文 (三四)
- 浜本純逸・志摩陽伍・松田哲・原田慶子・大森弘志・米沢純夫 (四二)
- わたしの授業 こんなところから
手づくり絵本で平和教育を 小宮山公子 (五四)
- 日平研図書室 山中恒著 図説・戦争の中の子どもたち (五二)
- 天皇問題を考える
国家神道の歴史と平和教育の課題 山口和孝 (六一)
- 日の丸・君が代・天皇問題をどう教えたか 渡辺雅之 (六八)
- 沖縄からのレポート
ひめゆり平和祈念資料館の開館に寄せて 田港朝昭 (七四)
- レポート 昔銀座に戦争があつた 岩倉務 (七七)
- わたしの平和教育 子どもとともに掘り起こす 上田精一 (八三)
- わたしの戦争体験 古いアルバムの中の一枚の写真 児玉辰春 (九一)
- 連載 戦争資料館を訪ねて2 広島平和記念資料館 (九五)
- 連載 私の本棚 石上正夫 (九八)
- 日平研の窓 (九七)
- 第三七号 一九九〇年一月 (季刊)**
- 特集 いま核問題をどう教えるか 田川時彦 (五)
- 主張 核戦争を拒否し核兵器廃絶を求める人権宣言を
論文 安斎育郎 (八)
- いま核問題をどう教えるか 横川嘉範 (二四)
- 核時代をともに生きる人間として 川島篤三 (二四)
- 実践記録 核問題をどう教えるか 九平研 (三二)
- 地球を守るのは、誰
中学校における「核問題」の実践

核時代を生きぬくために
わたしの授業 こんなところから
四年生へ「実写フィルム」を

澤野重男 (四〇)

日平研図書室

神保映 (四八)

石川文洋著 フォトドキュメント・ベトナム

戦争と人間 (五四)

天皇問題を考える
憲法の精神に沿った指導を

福井雅英 (五六)

厳しい状況をのりこえるもの

北村次郎 (六二)

レポート 教科書裁判と沖縄戦

石山久男 (六八)

わたしの戦争体験 おろかだった青春時代への回顧

小菅英江 (七四)

連載 戦争資料館を訪ねて 長崎国際文化会館

わたしの平和教育 (七八)

わたしの平和教育

生命と平和の尊さを文学の感動体験で

渡辺庄司 (八〇)

平和教育の到達点と当面する課題

藤井敏彦 (八六)

日平研の窓

(九四)

読者のひろば

菊田秀子 (九五)

連載 私の本棚

高橋信雄 (九六)

季刊・平和教育 既刊主要目次

(九八)

第三八号 一九九〇年四月 (季刊)

特集 いま、子どものいのち・人権を

提言 平和教育の視点

城丸章夫 (五)

エッセイ

子どもへの“人体実験”を許すな

芝田進午

私の生きる権利あなたの生きる権利

丸木政臣

子どもの権利条約と学校災害

升井登女尾

子どもの人権と伝習館訴訟

石井小夜子

論文 いま、子どものいのち・人権を

折出健二 (二四)

実践記録 子どもいのち・人権を

いのちの大切さ尊さをどう教えていくか
子どものいのちと人権を守る学校づくりをめざして
いのちと人権を育む母親達の輪

大和久勝 (二二)

論文 いま、貧困と家庭崩壊の問題を問う

遠藤譲 (二八)

実践 悩み苦しむ子どもによりそいはげます

大野寿美 (三四)

日本におけるこらしめの思想

近藤郁夫 (四〇)

解説 子ども権利条約

藤井珈世 (四六)

子どものいのちと人権に関する文献紹介

遠藤芳信 (五三)

「子どもの誌」 解説・本間繁輝

林量椒 (六二)

わたしが平和の大切さにめざめたとき

佐貫浩 (七二)

『ぼくいきたかった』との出会い

谷光 (七六)

私の平和教育

生命に触れて生命を実感した！

上中良子 (八〇)

私の戦争体験 —東京大空襲と戦後の怨念—

藤田秀雄 (八七)

レポート 「被害者援護法」制定の意義と展望

小西悟 (九一)

障害者と戦争

清水寛 (九七)

連載 平和教育入門講座

教科をとおしてどうすすめるか

大槻和夫 (一〇五)

子どもの状況に切りこむ平和教育

関誠 (一一三)

父親・母親がとりこむ平和教育

松原多恵子 (一二〇)

連載 戦争資料館を訪ねて 第五福竜丸展示館

山上俊夫 (一二八)

読者のひろば 失敗した授業に学ぶ

(一二〇)

日平研の窓 第18回全国平和教育シンポジウム案内

(一二〇)

第三九号 一九九〇年一〇月 (季刊)

特集 被爆者の生き方から何を学ぶか

提言 被爆者の喪失体験から人間回復への道

横川嘉範 (五)

エッセイ

木を愛する被爆者

大川悦生 (六)

語れぬ人々の苦悩を受け継いで
被爆者と共に生きるということ

原爆モニユメント

論文

被爆者問題から何を学ぶか

人間は原爆とどうたたかっただか

原爆は人間に何をしたか

「証言」にみる被爆者の生き方

証言 被爆者として生きる

「反核・平和の旅」を生きる目標として
生き残った人間の責任

私の中のヒロシマ

体と心の中の原爆とたたかいつづけ

実践 子どもたちは生き方をどう学んだか

戦争・原爆を語り継ぐ人に

「語り部」として生きて

ピース・フロム・ナガサキ

詩・文学をとおして生き方をみる

「子どもの詩」

わたしが平和教育の大切さにめざめたとき

「イモ雑炊」から平和運動へ

私の戦争体験―人間から鬼へ、鬼から人間へ―

連載 平和教育入門講座

教科をとおしてどうすすめるか

子どもの状況に切りこむ平和教育

父親・母親がとりこむ平和教育

連載 戦争資料館を訪ねて 南風原文化センター

読者のひろば 自らの生き方を問い直しながら

図書紹介 ローズ・ブランチュ

伊藤直子

池田真規

宇吹暁

城丸章夫 (二四)

伊藤壮 (二二)

石田忠 (三一)

鎌田定夫 (三九)

渡辺千恵子 (四七)

石田明 (五三)

里見香世子 (五九)

田川時彦 (六五)

丸谷敦子 (七〇)

和田耕一 (七六)

妹背修治 (八二)

増岡敏和 (八八)

解説・本間繁輝 (九六)

橋本理市 (九八)

富永正三 (一〇二)

今井省三 (一〇八)

古谷信一 (一一七)

白根厚子 (一二三)

吉浜忍 (一〇六)

伊濱千代 (一二〇)

石子順 (一二九)

第四〇号 一九九一年四月 (季刊)

特集 映像文化と平和教材

提言 湾岸戦争と大人の責任

論文 映像文化と認識の問題

実践

チャップリンと世界の友達から学ぶ

「現代」と出会う子どもたち

ビデオ教材「戦争に反対した人々」をつくって

日常的な取り組みを生かして

映像の中の暴力・戦争

映画「ビキニの海は忘れない」を撮り終えて

アンケート 私の推薦するビデオ教材

「子どもの詩」

論文

平和憲法の今日的意義を考える

世界平和のいない手に育つこと―「子どもの権利条約」をめぐる―

私が平和の大切さにめざめたとき

足もとから、平和と青春を見つめて

私の戦争体験―戦争の中の子どもと教師

レポート

原爆被爆建造物を考える会と「追体験」教育

韓国の若者は日本をどう見ているか

私の平和教育 “人間らしい人間になるための勉強よ”

連載 平和教育入門講座

教科をとおしてどうすすめるか

子どもの状況に切りこむ平和教育

佐貫浩 (五)

汐見稔幸 (六)

木崎克昭 (二四)

関誠 (二二)

山上俊夫 (三〇)

柴田健 (三六)

山田和夫 (四二)

森康行 (四八)

解説・本間繁輝 (五八)

渡辺久丸 (六〇)

森田俊男 (六八)

安岡三智 (七五)

日暮幸子 (八〇)

空辰男 (八四)

石渡延男 (九〇)

生田目静子 (九六)

小島昌世 (一〇二)

宮崎久雄 (一一〇)

父親・母親がとりくむ平和教育

橋本恵美子 (二一六)

連載 戦争資料館を訪ねて 大久野島・毒ガス資料館

武部寛 (二一一)

読者のひろば ベタ記事を読む時代

梅田正己 (二二四)

図書紹介 行李の中から出てきた原爆の詩

池田正彦 (二二六)

第四号 一九九一年一〇月 (季刊)

川合章 (五)

特集 湾岸戦争と子どもたち

佐貫浩 (六)

提言 ことばが話せるのは
日本と学校にとつての湾岸「戦後」を考える

広木克行 (二四)

実践 湾岸戦争と子どもたち
平和を問いつづける子ども・にんげんを

丹羽徳子 (二二)

歴史を学び、湾岸戦争とともに考えた六年生

伊藤和美 (二八)

祖父母の戦争体験をダブらせるなかで

中俣勝義 (三四)

中学三年生と湾岸戦争そして世界

渡辺雅之 (四〇)

湾岸戦争とヒロシマの高校生

澤野重男 (四六)

親子の対話・家族のできる実践を

竹縄良一 (五二)

レポート
投稿作品に見る子どもたちの湾岸戦争

渡辺増治 (五八)

子どもたちは主張する

根岸泉 (六〇)

被爆者のとらえた湾岸戦争と平和教育の課題

田川時彦 (六八)

湾岸戦争が問いかけるもの

藤田秀雄 (七四)

戦争はどう報道されたか

亀井淳 (八〇)

「子どももの詩」

解説・本間繁輝 (八六)

私が平和の大切さにめざめたとき

相原久仁子 (八八)

「基本懇意見書」への怒りをバネに

野村章 (九二)

私の戦争体験―戦時下のそだち

守谷隆昭 (九六)

私の平和教育 全校児童による人権劇に取り組んで

連載 平和教育入門講座

みんなで考え、みんなでつくる

堀江邦昭 (二〇二)

子どもとともに「なぜ」と問い続ける

佐藤慎一 (二一〇)

日本国憲法にはげまされた歩み

平田壽子 (二一六)

連載 戦争資料館を訪ねて 平和資料館「草の家」―高知

文本レイ子 (二二三)

読者のひろば 加害責任と戦後補償

高嶋伸欣 (二二四)

図書紹介 『高校生が追う陸軍登戸研究所』

渡辺賢一 (二二六)

Japan Association of Peace Education
and Educational Magazine "Heiwa Kyoiku" (2)

MARUYAMA Tsuyoshi, TONOIKE Akiho